

## 虚言の効用

——『ウィングミア卿夫人の扇』の場合——

印 藤 京 子

### I

オスカー・ワイルドは、機知に富んだ逆説と軽妙な会話の中に痛烈な社会批判を盛り込んだ彼独自の喜劇世界を創りあげた。表面的に洗練された台詞の妙味に、ともすると包み隠されてしまいがちな彼の問題意識は、通常作品の題名からうかがい知ることができる。芸術家の意図ではなく、芸術作品の喚起する印象を重視しつつも “The name one gives to one’s work... is the only part of one’s work in which the artist speaks directly in his own person...”<sup>1</sup> とするワイルドの最初の喜劇『ウィングミア卿夫人の扇』は、1892年2月20日、セント・ジェームズ劇場で幕を開けた。ウィングミア夫妻の愛の証であるはずの扇が、それを手にする人の意識次第で怒りの表徴にも、裏切りの象徴にも変化するさまは、ヴィクトリア朝の偏狭な物の見方に対するワイルドの挑戦であり、認識の多様性に対する彼の鋭い批評である。見事な狂言回しを演じて劇の真髓へと観客をいざなうこの小道具は、終幕で、自らの深奥に内在する母性愛を認識するアーリン夫人に贈られる。

しかし、その役回りは母性愛の証として帰結するのではない。ワイルドはこの小道具の行方に執拗なこだわりを見せ、観客の意識をその行方に向ける。

Mrs Erlynne

...Lord Augustus! Won't you see me to my carriage? You might

carry the fan.

Lord Windermere

Allow me!

Mrs Erlynne

No; I want Lord Augustus. I have a special message for the dear Duchess. Won't you carry the fan, Lord Augustus?

Lord Augustus

If you really desire it, Mrs Erlynne.

Mrs Erlynne

Of course I do. You'll carry it so gracefully. You would carry off anything gracefully, dear Lord Augustus.<sup>2</sup>

こうしてウィンダミア卿夫人の扇は、最終的にオーガスタス卿に託されて幕となる。ここで当然問題となるのが、オーガスタス卿とこの小道具との関わりである。扇を手にする男のどこが美しいのか。言い換えれば、ワイルドはオーガスタス卿に何を託したのであろうか。この問題の解答は、残念ながら扇の軌跡を追うだけでは得られない。ここは今一度、この作品の題名について考えてみる必要がある。

実は、ワイルドは初めからこの小道具を作品の題名として考えていたのではない。当初予定していた題名は“A Good Woman”である。題名を変更した理由に関しては憶測の域を出ないが、1891年に単行本として出版されたトーマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』の副題 *A Pure Woman* と関係があるのではないかと思われる。大いに話題を呼んだ作品と類似した題名を付けることは、ワイルドの自尊心と美意識が許さなかったのではないだろうか。しかもこの作品は、彼の喜劇第一作目である。初めて手掛ける喜劇の世界に、悲劇では成し得なかった何かを期待していたことは、“I am not satisfied with myself or my work. I can't get a grip of the play yet: I can't get my people real.”<sup>3</sup> と、喜劇を依頼したジョージ・アレキ

サンダーに書き送っていることから推測される。また、マックス・ビアボームに、“*The Happy Hypocrite* is a wonderful and beautiful story, though I do not like the cynical directness of the name.”<sup>4</sup> と皮肉まじりの手紙を送っていることから、芸術家として二番煎じを快く思わなかったこともわかる。いずれにせよ、変更後も当初の題名を捨てきれず、*A Play about a Good Woman* を副題として残していることから、変更を余儀なくされたことは間違いなさそうである。従って、ワイルドの真意は固執した副題の方にあり、ウィンダミア卿夫人の扇の行方もさることながら、“a good woman” の行方に彼の意図が隠されているものと思われる。そこで、まず“good” と形容される人物について少し検討してみたい。

## II

“Oh, nowadays so many conceited people go about Society pretending to be good. . . .” (p. 8) と、冒頭で“good” と形容される人物について警鐘が発せられてこの劇は始まる。警鐘はなおも続き、“It is absurd to divide people into good and bad. People are either charming or tedious.” (p. 11) と結論が下される。しかし、ダンディーを自認するダーリントン卿の警鐘は、この時点では“good” という体面にとらわれ、「“good” か否か」という二元的な物の見方しかできない俗物の状況を示唆しているに他ならない。そして、それを裏付けるかのようにベリック公爵夫人が登場して “We’re good. Some of us are, at least.” (p. 14) と明言し、さらに “Men become old, but they never become good.” (p. 19) と極論する。夫だけは例外だと思っていたウィンダミア卿夫人も、結局はベリック公爵夫人の言葉を信じることになる。

この結果、第一幕の幕切れで“good” と評される人物は、残された少数の「うぬぼれの強い」女性だけとなる。その筆頭がピューリタンの潔癖さで善悪をはっきりと区別し、絶対に妥協を認めないウィンダミア卿夫人

である。こうした彼女の生活信条は、自他共に認めるところである。ウィングミア卿は、“How hard good women are!” (p.25) とその潔癖さに手を焼くが、“good” であるからこそ人々は彼女の判断を尊重し、強いては彼女の舞踏会に招かれることが一種の身元保証となる。ベリック公爵夫人が娘婿として目を付けたホッパー氏に招待状を送ってほしいと頼むのも、招待状が欲しいとアーリン夫人がウィングミア卿をせつつくのも、そのためである。この点はウィングミア卿も心得ていて、“...she knows that you are a good woman—and that if she comes here once she will have a chance of a happier, a surer life than she has had.” (p.25) と妻に説明する。また、オーガスタス卿もアーリン夫人が舞踏会に来ることを知って“Then she’s all right, dear boy.” (p.33) と、ウィングミア卿夫人の人選に全幅の信頼を置いている。まさしく “If you pretend to be good, the world takes you very seriously.” (p. 8) と言ったダーリントン卿の踏んだ通りである。

一方、“I will have no one in my house about whom there is any scandal.” (p.14) と自負するウィングミア卿夫人は、夫の愛人と噂される評判の悪いアーリン夫人に対して、断固たる態度を示す決意を固める。今さっき届いたばかりの夫からの誕生日祝いである扇に怒りを込めて、“If that woman crosses my threshold, I shall strike her across the face with it.” (p.27) という彼女は、自分の行為の正当性を主張し、“There is not a *good* woman in London who would not applaud me.” (p.26) と自信たっぷりである。

しかし、いざ舞踏会が始まると、ウィングミア夫人卿を後押ししてくれそうな “good woman” は差し当たってどこにもいない。どうやら、ベリック公爵夫人の言う通り、“good woman” はごく限られた少数のようである。逆に、“It takes a thoroughly good woman to do a thoroughly stupid thing.” (p.40) と、“good woman” をあざける声が聞こえてくる。自分の信

条に誇りを持って生きてきたウィンダミア卿夫人もこれを敏感に感じ取り、“I feel that every woman here sneers at me as she dances by with my husband. What have I done to deserve this?” (p.41) と誇りを傷つけられた胸の内をダーリントン卿に訴える。

一方、悪名高きアーリン夫人は、案の定、ウィンダミア卿夫人の主催する舞踏会に列席していることを楯に、得意の話術で次々と上流夫人に取り入り、社交界に返り咲くという積年の夢を実現する。ここで思い出されるのが“Do you know I am afraid that good people do a great deal of harm in this world.” (p.10) と言ったダーリントン卿の警句的逆説である。自分に付けられた“good”というレッテルの悪影響を目の当たりにするウィンダミア卿夫人は、歯がゆい思いをし、焦燥感にかられる。そして、こうした事態を招いた夫の仕打ちに心を傷め、ダーリントン卿のもとへ走る。駆け落ちすることで潔癖さに泥を塗り、自らこのレッテルをはぎ取ろうとする彼女の行為により、第二幕の幕切れで、“good”に該当する人物は舞台上に存在しないことになる。

舞踏会が終わりダーリントン卿の部屋に舞台が移ると、悪女のレッテルを貼られたアーリン夫人が意外な側面を見せ、第一幕で耳にしたダーリントン卿の警鐘がにわかに真実味を帯びてくる。ところが、人を「“good”か否か」と選別することの愚かしさを指摘した当の本人は自説を忘れ、“She is a good woman. She is the only good woman I have ever met in my life.” (p.65) と、自分の惚れた女性は“good”だと力説する。しかし、ここで“good”と評されるウィンダミア卿夫人が物陰に身を潜めている状況では、この言葉も虚ろに響くばかりか、かえって逆効果となり、悪の魅力をおおる結果となる。折しも話題の中心は、男にとって好ましい、聡明でしたたかな悪の魅力を備えたアーリン夫人である。ここに集まったダンディーたちは、こぞって悪女の魅力を讃える。オーガスタス卿までもが“I prefer women with a past. They’re always so demmed amusing to talk

to.” (p.62) と言って、心ならずも “Wicked women bother one. Good women bore one. That is the only difference between them.” (p.61) とするセシル・グレアムの説を肯定する始末である。このような状況のもとで、アーリン夫人が自己犠牲という行為によってウィンダミア卿夫人の危機を救うに及んでは、男ならずとも悪女の内に秘められた魅力を認めざるを得なくなる。

さらに、機知に富むダンディーたちの会話の妙味が披露されると、“I don’t think we are bad. I think we are all good. . . .” (p.64) とベリック公爵夫人の説を逆転させたダンビーの言い分も、何か真実を含蓄しているように聞こえてくる。こうして第三幕の幕切れで、“good” はその概念を根底から揺すぶられる。これは扇の場合と同様、認識の多様性に対するワイルドの批評である。また、ダンディーの仮面を脱ぎ捨てたダーリントン卿が自説を曲げる姿に、とかくレットルを貼りたがる俗物に対するワイルドの批判が読み取れる。

ヴィクトリア朝の価値観及びその社会通念に対するワイルドの挑戦は、“. . .the fourth act is to me the psychological act, the act that is newest, most true.”<sup>5</sup> という終幕で一層激しさを増す。家庭を見捨てた女はその罪を担い、“One pays for one’s sin, and then one pays again, and all one’s life one pays.” (p.57) と諭して、ウィンダミア卿夫人に翻意を促したアーリン夫人だが、センチメンタリズムをさんざんあおりたてた当の本人を待ち受けているのは、痛ましい死でもなければ、涙をそそる改悛の日々でもない。「過ちを犯した女は生涯救われぬ」というヴィクトリア朝の道徳的規範を裏切って、アーリン夫人は資産も地位もある男と結婚して外国へと旅立つ。観客の意表を突くこの結末は、アーリン夫人の嘘によってもたらされたものである。

秘密を中心にした筋書きでは、最後にはその秘密が明らかになるというのが常である。嘘であれば、ばれるものと相場が決まっている。ことに喜

劇では、“Illusion is whatever is fixed or definable, and reality is best understood as its negation. . . . Hence the importance of the theme of creating and dispelling illusion in comedy: the illusion caused by disguise, obsession, hypocrisy, or unknown parentage.”<sup>6</sup> という公式がある。しかしワイルドは、初めて手掛ける喜劇でこの公式を退け、嘘を嘘で収拾する。そして最後にウィンダミア卿夫人が、“Ah, you’re marrying a very good woman!”(p.89)とはなむけの言葉をオーガスス卿に述べる時、“good”という言葉は、したたかで大嘘つきのアーリン夫人に贈られる。こうして、虚構の世界が虚構の内に幕を閉じる。

### III

副題に着目すると、嘘つきを讃えるワイルドの声が聞こえてくる。しかもその代弁者が、偏狭な道徳観を振りかざすウィンダミア卿夫人であるという点に、ワイルドの痛烈な皮肉が込められている。彼女は、限られた情報をもとにアーリン夫人を悪女と決めつけ、新しい判断材料を突きつけられて前言を翻す。しかし、アーリン夫人自身は何ら変わってはいない。冒頭から悪女として登場するアーリン夫人は、その悪女ぶりに一層磨きがかかって退場する。結局、ウィンダミア卿夫人には何も見えていないのである。いかにも“To look at a thing is very different from seeing a thing. One does not see anything until one sees its beauty.”<sup>7</sup> とするワイルドらしい帰結である。

ワイルドが嘘つきのアーリン夫人を是認するのは、彼女の人生が虚言による虚構のものだからである。“The only form of lying that is absolutely beyond reproach is lying for its own sake, and the highest development of this. . . is Lying in Art.”<sup>8</sup> とするワイルドは、彼女を芸術家に見立て、その人生を芸術としてとらえている。「人生に深い幻滅感を抱き、芸術の中に人生を再生したいと願う」<sup>9</sup> ワイルドにとって、彼女は虚構を構築する嘘

つきであり、その虚言はそれが創造的であるがゆえに容認される美しい嘘となる。そして、美しい嘘が笑いを生み出す時、そこに喜劇的世界が生まれる。この喜劇的世界でアーリン夫人が土壇場で披露する「虚言に対する虚偽の釈明」は、ワイルドの言う“a fine lie...which that is its own proof”<sup>10</sup> に該当する。

美しい嘘をつくに当たっては、“true liar”としての気質が要求される。アーリン夫人には当然その気質—“frank, fearless statements” “healthy, natural disdain of proof of any kind” “superb irresponsibility”<sup>11</sup>—が備わっている。ワイルドは、その気質を巧みに利用して次元の異なる感興を喚起し、喜劇的世界を構築する。そこで、彼女の言動に表れるこの気質を検証して、この小論の冒頭で提起した問題点を考察したい。

まず“frank, fearless statements”であるが、これは枚挙にいとまがない。そこでひとまず、彼女がさっそうと登場する第二幕から幾つか拾ってみよう。アーリン夫人は登場するなり、早速ジェドバラ卿夫人に近づこうと、“Isn't that your aunt, Lady Jedburgh? I should so much like to know her.” (p.37) と、当たり前のような命令口調でセシル・グレアムに紹介の労をとらせる。礼節を重んじる人々は、当然このような発言に対して眉をひそめる。名うてのダンディーですら慣例を破ることになるこの大胆不敵な申し出にたじたじである。上流階級のジェドバラ卿夫人が、自分よりも社会的地位の劣る、しかも評判のよくないアーリン夫人と親しげに話し込んでいるのを見て、ダンビーも目を疑う。

Dumby

Did you introduce Mrs Erlynne to Lady Jedburgh?

Cecil Graham

Had to, my dear fellow. Couldn't help it! That woman can make you do anything she wants. How, I don't know. (p.37)

願わくば、自分には話しかけてくれるなど、ここでこそと逃げだすダ

ンビーは、アーリン夫人の次なる被害者である。愛人のプリムデイル卿夫人と一緒にいるダンビーに向かって、“I am sorry I have been out the last three times you have called. Come and lunch on Friday.” (p.39) と話しかけるアーリン夫人は、自分の“frank, fearless statement”で一転して観客を楽しませる。同じように、ウィンダミア卿に単刀直入にお金を無心する彼女の論述は脅迫めいていて観客の反感をあおるが、同じ脅迫でも相手が代わると打って変わって喜劇的要素が織り込まれる。幕切れて、“... don't let Winderemere out of your sight tonight. If you do I will never forgive you. I will never speak to you again. I'll have nothing to do with you.” (p.51) というアーリン夫人の剣幕に圧倒されたオーガスタス卿は、“Well, really, I might be her husband already. Positively I might.” (p.51) とつぶやいて、観客の笑いを誘う。

次に“healthy, natural disdain of proof of any kind”であるが、この気質は本人が登場する以前に提示される。“She explains everything. Egad! she explains you. She has got any amount of explanations for you—and all of them different.” (p.33) と述べるオーガスタス卿の戸惑いの中に、観客はまだ見ぬアーリン夫人のしたたかさを感じ取る。しかし、彼女が観客の前に姿を現すと、この気質もオーガスタス卿を介して笑いに転化される。

Cecil Graham

...You said you've heard—

Lord Augustus

Oh, she's explained that.

Cecil Graham

And the Wiesbaden affair?

Lord Augustus

She's explained that too.

Dumby

And her income, Tuppy? Has she explained that?

Lord Augustus

She's going to explain that tomorrow. (p.61)

ウィンダミア卿夫人の浮気の動かぬ証拠も、アーリン夫人の手にかかると “I am afraid I took your wife's fan in mistake for my own, when I was leaving your house tonight. I am so sorry.” (p.70) と簡単に動いてしまう。彼女が観客の前で実際に堂々と釈明をして見せるのは、これが最初で最後だが、ここで彼女は遺憾なくその気質を発揮して、ヴィクトリア朝の観客の道徳観を存分に満足させる。この嘘のために、今度はこの扇が自分の浮気の証拠となるが、彼女は嘘をさらに美しく上塗りしてオーガスタス卿を喜ばせる。騙されて嬉しそうに “...I assure you, most gratifying to me, the whole thing... She is just the woman for me. Suits me down to the ground.” (p.88) と、彼女と結婚できる喜びを素直に語るオーガスタス卿は、まさにワイルドの言う “...the aim of the liar is simply to charm, to delight, to give pleasure.”<sup>12</sup> を体現している。二人の結婚は、当時の観客の道徳観を逆撫であるが、彼らが外国で暮らすという結末で相殺される。ここでもワイルドは、観客の期待を巧みに利用して喜劇的世界の崩壊を未然に防ぐ。

最後の “superb irresponsibility” の筆頭にあげられるのが、母親としての義務の放棄である。その昔、娘を捨てたアーリン夫人には、今も母性愛は似合わない。扇を手にして “Quite wonderful. Thanks—it will always remind me of you.” (p.86) と礼を言うアーリン夫人は、観客のセンチメンタリズムを満足させるが、彼女自身は母性愛に対して美しい感動を覚えてはいない。家庭を捨てて20年このかた、母親としての感情を持たずに生きてきた彼女は、 “Only once in my life have I known a mother's feelings. That was last night. They were terrible—they made me suffer—they

made me suffer too much.” (p.80) と戸惑いを見せ、畏怖の念を抱く。社会通念に挑戦する彼女にとって、己の内にある母性愛を認識させられることは、自らの虚構の世界の崩壊を意味する。そのため彼女は、“I lost one illusion last night. I thought I had no heart. I find I have, and a heart doesn't suit me, Windermere.” (p.80) と言って現実を否定し、現実生活の次元を超越した虚構の世界を自分の生活基盤として選択する。これは彼女にとって決して安易な選択ではないが、“The first duty in life is to be as artificial as possible.”<sup>13</sup> とするワイルドの敷いたレールを彼女は走る。その伴走者として白羽の矢ならぬ扇を当てられるのがオーガスタス卿である。

この伴走者の存在は、アーリン夫人を芸術家に見立てるワイルドには不可欠のものである。芸術に鑑賞者が必要であるように、嘘つきにはその嘘を信じてくれる人が必要である。オーガスタス卿は、アーリン夫人が自ら勝ち取る鑑賞者であり、その存在は、彼女の虚構の人生が芸術として完成することを意味する。「芸術美の崇拜者だけが真の芸術鑑賞者になり得る」<sup>14</sup> ように、オーガスタス卿は虚言の鑑賞者として真実を追求することなく、ひたすら彼女の美しい嘘を信じる。信じることで芸術を享受できる彼は幸せ者である。要するにワイルドは、彼に真の芸術鑑賞者のあるべき姿を託したのではないだろうか。

芸術家と鑑賞者、この二人の間を取り持つ嘘の力学が虚構の世界を支えている。しかし、ワイルドの芸術が当時のイギリスの精神風土となじまなかったように、因習的思考方に浸食された社会では、この嘘の力学がうまく作用しない。だから二人は、“Demmed clubs, demmed climate, demmed cooks, demmed everything.” (p.88) に見切りをつけるのである。これをアーリン夫人が社交界から遁走すると思わせて、固定観念にとらわれた観客を納得させる着想に、ワイルドのダンディズムの真髄をみることが出来る。

## IV

嘘つきはアーリン夫人だけではない。ウィングミア卿の屋敷には、嘘つきが集まっている。意識して嘘をつく人、意識せずに嘘をつく人、自分のために嘘をつく人、他人のために嘘をつく人、すぐばれる嘘をつく人、そして自分からばらしてしまう人。そもそもこの作品の根底をなす筋書き自体が、ベリック公爵夫人の妄想に端を発している。妄想も、事実と反する事柄を述べている点では嘘に違いない。そこでまず、このベリック公爵夫人を検証してみたい。

ベリック公爵夫人もアーリン夫人に負けず嘘つきである。彼女にも“true liar”の気質が備わっている。ただ彼女の場合は、アーリン夫人とは逆に、社会の因習や規範をまっとうするための嘘をつく。これはとりもなおさず、嘘をつかなければまっとうできないようなヴィクトリア朝社会の因習や規範に対するワイルドの嘲笑である。

結婚して妻となる以外に社会的立場などあり得なかったヴィクトリア朝の多くの女性にとって、結婚市場から締め出されることは、まさに自己実現の場を失うことに通じた。このような風潮の中で、ベリック公爵夫人は、実現すべき自己など持ち合わせていそうにもない娘アガサの婿探しに躍起となっている。相手が少々足りない男でも、この際文句は言えない。贅沢を言っていたら行き遅れてしまう。だからベリック公爵夫人は、アガサの売り込みに余念がない。“Yes, mamma.”としか言わない娘を、趣味のよい情緒豊かな話し上手の娘として売り込む。そして、目を付けたオーストラリアの成り金の息子ホッパー氏が現れると、“Do you know, Mr Hopper, dear Agatha and I are so much interested in Australia. It must be so pretty with all the dear little kangaroos flying about.” (p.30) と、いかにもアガサをオーストラリアに嫁がせてもいいような口ぶりで彼の気を引く。しかし、ホッパー氏がアガサに求婚したのを確認すると、オースト

ラリアは“that dreadful vulgar place” (p.45) になり、ぴょんぴょん跳ねるかわいいカンガルーは“horrid kangaroos crawling about” (p.45) に変身する。当然オーストラリアに連れて行きたいというホッパー氏の申し出は、あっさりはねつけられる。

娘の婚約を演出するベリック公爵夫人は、自分の結婚生活を演出することも忘れない。彼女は、ウィンダミア卿とアーリン夫人を引き離すには、夫の浮気にめくじらを立てずに、彼をロンドンから連れだすことが一番だと提案する。そして、“...on several occasions after I was first married, I had to pretend to be very ill, and was obliged to drink the most unpleasant mineral waters, merely to get Berwick out of town.” (p.18) と、かつての自分の経験談を話して聞かせる。

プリムデイル夫人も結婚生活を演出する嘘つきの一人である。もっとも彼女の場合は、ダンビーとの逢瀬を楽しむために夫をアーリン夫人に近づけるといふ、ちょっとおもむきの違う演出である。ベリック公爵夫人が娘の人生を演出するように、彼女は自分の人生のみならず夫の人生をも演出する。

いずれの夫人にせよ、アーリン夫人同様、虚言はその生活にとって有用な武器となっている。アーリン夫人の嘘がヴィクトリア朝社会に挑戦する外から内へ向かうベクトルを有するとすれば、ベリック公爵夫人並びにプリムデイル夫人の嘘は逆方向のベクトルを有すると言える。従って、彼女たちの提供する笑いは自戒的な性質を持ち、そこには現実をせせら笑うワイルドの忍び声が聞こえてくる。

最後にウィンダミア卿夫人だが、夫に真実を告げないということでは彼女も嘘つきである。しかし彼女は“true liar”ではない。現実の生活に埋没する彼女は、虚構を構築しないという点でワイルドの審美的見地からは逸脱する嘘つきである。さらに、今まで通り夫の鑑賞に耐えうる妻を演じる彼女は、体面を取り繕う偽善者である。偽善者である彼女に対するワイ

ルドの目は終始冷たい。彼女のピューリタンの的道德観が、偽善者の仮面であることは、男であれ女であれ浮気は許されるべきではないと断言していた彼女が、“My husband may return to me.” (p.43) と述べる第二幕で露呈する。その時点でダーリントン卿は彼女の偽善的生活を予告する。

You would take him back ! You are not what I thought you were. You are just the same as every other woman. You would stand anything rather than face the censure of a world, whose praise you despise. In a week you will be driving with this woman in the Park. She will be your constant guest—your dearest friend. (p.43)

この予告はアーリン夫人の外国行きで実現しないが、ダーリントン卿の読みが正しかったことは明らかにされる。外国へ行くと知った時 “But I wanted so much to come and see you.” (p.76) というウィンダミア卿夫人の落胆ぶりが、このことを裏づける。結局ワイルドは、社会通念を虚言ではねつけ、時代を先取りするアーリン夫人の人生を是認する一方で、時代遅れを自負するウィンダミア卿夫人の人生を諦観している。

## V

嘘つきは女ばかりではない。男もしっかり嘘をつく。嘘をつかないのは鑑賞者に徹するオーガスタス卿ぐらいである。オーガスタス卿の魅力は、“...you can't explain anything. It is your chief charm.” (p.36) とアーリン夫人が言うように、嘘つきとしての気質が欠落しているところにある。彼の論述は虚言とは程遠く “So simple and so sincere !” (p.39) である。他のダンディーたちはこぞって嘘つきである。しかし、“true liar” の気質が備わっている彼らの嘘は概して美しい。ただ一人美しくない嘘をつくウィンダミア卿をとりあげてこの小論を締めくくりたいと思う。

ウィンダミア卿は、己の世界の保全に躍起となっている俗物である。彼が妻にアーリン夫人のことを告げないのは、他でもない自分のためである。

“I dare not tell her who this woman really is. The shame would kill her.” (p.28) という時、彼は自分の抱く妻のイメージが壊されることを案じている。自分の妻は社会の悪に染まらず、永遠に子供のような無邪気さを備えているべきだと信じる彼は、“You sully the innocence that is in her.” (p.78) とアーリン夫人を非難し、できるだけアーリン夫人を妻から遠ざけようとする。アーリン夫人が出て行くのを見て、自分の世界の安泰を確認する彼の安堵は、“Child, you and she belong to different worlds. Into your world evil has never entered.” (p.87) と、妻の髪を優しく撫でながら語る彼の言動に表れている。また、再三繰り返されるこの呼びかけは、妻の人格を認めず、ただ永遠の少女のように無垢のままにしておきたいと願う彼の願望の表れである。

ウィンダミア卿は、「物事の本質を根本的に考えずに習慣と道徳によって保護されてきた『美德』を看守している」<sup>15</sup> という点で、当然ワイルドの標的となるべき偽善者である。ウィンダミア卿夫人を狙上にしたワイルドが、ウィンダミア卿には手を触れずに幕を下ろしている。ここにワイルドのダンディズムの限界を見るべきなのだろうか。

## 注

1. Rupert Hart-Davis ed., *The Letters of Oscar Wilde* (Harcourt, Brace & World, 1962), p. 576.
2. Ian Small ed., *Lady Windermere's Fan: A Play about a Good Woman* (Benn, 1980), p. 87. なお、これ以外の作品は *The Complete Works of Oscar Wilde* (Harper and Row, 1989) を使用した。
3. *Letters*, p. 282.
4. *Letters*, p. 576.
5. *Letters*, p. 332.
6. Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (Princeton U. P., 1957), pp. 169-70.
7. “The Decay of Lying,” p. 986.

8. "Decay," p. 990.
9. 城戸照文, 『英国ヴィクトリア朝人生批評・審美批評』(千城, 1992), p. 119.
10. "Decay," p. 971.
11. "Decay," p. 971.
12. "Decay," p. 981.
13. "Phrases and Philosophies for the Use of the Young," p. 1205.
14. 『英国ヴィクトリア朝人生批評・審美批評』, pp. 171-72.
15. 山田勝, 『世紀末とダンディズム—オスカー・ワイルド研究—』(創元社, 1981), p. 268.